

《ワークショップ報告》

ワークショップ

原発：ここが知りたい Q&A



2013年7月7日(日)13:30 ~ / 新座市ほっとぷらざ

報告とお礼

7月7日に開催いたしましたワークショップ「原発：ここが知りたいQ&A」にご参加、ご協力いただき、ありがとうございました。

みなさまが日ごろ感じていらっしゃる、原発について知りたいこと、確かめたいこと、言いたいことなどを分かちあう場にしたいと企画いたしました。

おかげさまで、参加者54人、スタッフ21人・お子さん9人で会場はいっぱいとなり、熱気のある集まりになりました。

アンケートにも見られますように、児玉医師の講演、ワークショップでの話し合い、放射能の測定とも、たいへん好評でした。

「また開いてほしい」、「また開きたい」との声があがって、第2回を11月23日に開きます(チラシ参照)。

自分たちの命と健康を守るために、考え、話し合い、声を上げつづけましょう。

プログラ プログラム

基調講演：児玉 順一

(ときがわ町こだま医院院長)

放射能測定の見学&質疑：石田 照美

(みんなの測定所・ふじみーる)

ワークショップ

テーブル①放射能と子ども

助言者：児玉 順一

コーディネーター：佐藤 麻由子

テーブル②原発と事故

助言者：水澤 靖子

(反原発出前のお店)

コーディネーター：合田 隆

テーブル③脱原発と自然エネルギー

助言者：向井 雪子

(未来の福島子ども基金)

コーディネーター：大畑 豊

ワークショップの報告と話し合い

原発：ここが知りたいQ&A実行委員会

【基調講演】

内部被ばくが病気を増やす

～「ペトカウ効果」が教えてくれたこと～

こだま医院院長 児玉 順一

私は福島第一原発の事故の後から、放射能の勉強を始めました。放射能のことを知らないと内科医としての責任がはたせないと思ったのです。子や孫の健康も心配でしたが、彼らの将来を思うと、いつも福島子どもたちがかさなりました。

手当たり次第の勉強の中で、肥田舜太郎医師の講演とその訳書『ペトカウ効果—人間と環境への低レベル放射能の脅威』に出会いました。

「低線量被曝はこわくない。放射能でこわいのは癌だけが、その癌も低線量なら心配ない。」というウソをペトカウ効果がはね返してくれると直感しました。

1972年、アブラム・ペトカウ氏は、低線量の放射線が細胞膜をこわすことを発見しました。低線量でも放射能が細胞膜を傷つけ、病気をおこすことを示したのです。

ペトカウの実験までは、細胞膜は注目されず、放射線が細胞核の中の遺伝子を傷つけて、癌や奇形を生み出すということだけが論じられてきました。ところが、ペトカウ効果では、細胞膜も傷つくことが示され、しかも、高線量の外部被曝では、細胞膜をこわすのに総線量で35000ミリシーベルトも必要なのに、低線量の長時間内部被曝では、5000分の1の7ミリシーベルトで十分だったのです。

膜をこわすのは、放射線が細胞内の酸素や水分子などから作る活性酸素の酸化力でした。す



たくさんの図や表を使った講演を聴く参加者

ると、放射能は癌だけでなく、癌以外の病気もふやすこととなります。ですからペトカウ効果は、ICRPなどの原発推進機関には都合の悪い発見で、これまでずっと無視されてきました。

私の読んだ『ペトカウ効果』は大著で、だれでも気軽に読めるというものではありません。ペトカウ効果をたくさんの人に知ってもらうために、普及用のパンフレットを作りたいと思いました。かんたんにと考えたのに、そのための勉強がどんどん広がって、世界中の放射能汚染と病気の関係を探ることになり、一年半もかかってしまいました。

勉強のまとめになったのは、チェルノブイリの原発事故後の健康被害の歴史です。ウクライナ、ベラルーシ、ロシアでは甲状腺癌などの癌もふえましたが、癌以外の病気がたくさんふえ、細胞核の傷害だけでは説明のつかない状態になっています。まさにペトカウ効果の世界です。

福島原発による汚染は遠く関東にまで及んでいるし、100ベクレル以下というゆるい食品基準で、店頭の商品も安心ではありません。食べるものの安全を確かめ、内部被曝から自分たちの生命を守ることが大切になっています。私は関東の私たちの生命と健康を守る努力が福島につながり、福島の人たちを支える力にもなっていくと信じています。

児玉 順一さん 埼玉県ときがわ町にある、こだま医院の院長。高等学校で社会科の教員を勤めたのち群馬大学医学部に入学。3・11後の臨床事例から内部被ばくに関心を持つ。「ペトカウ効果」について学び、1年半かけて論文「日本からの手紙」をまとめた。英文への翻訳をすすめている。



どのテーブルでも熱い思いの話し合いが



七夕飾りの下で保育スペースは大賑わい

各テーブルからの報告

テーブル①

放射能と子ども

給食の放射能検査を

助言者：児玉順一（医師）

コーディネーター：佐藤麻由子（和光市在住）

参加者は 29 名で、ほぼ全員が保育園・幼稚園・小学校に通うお子さんを育てているお母さん。お住まいは朝霞、新座、和光、志木、富士見市、ふじみ野市、三芳町など、東上線沿線の近隣の方たちです。

話し合うには時間が足りないので、自己紹介を兼ねて、それぞれの思いを 1 分ずつ話していただくことにしました。

話題が集中したのは学校や保育園での給食。どの市町も放射能を検査していますが、子どもに内部被ばくをさせない十分な態勢とはなっていません。個人あるいはグループで行政に働きかけた体験などが報告されました。

また、放射能について、考えていることを周囲の人にどう伝えたらいいのか。伝えると孤立しかねない悩みも、多くのお母さんたちから出

されました。

食材の放射能や校庭の空間線量が減ってきたので、行政には「もういいのではないか」という雰囲気がある。しかし、「事故を起こした原発から放射能は洩れつづけている。測ることは福島で子どもを育てているお母さんたちの痛みを共有すること、福島を忘れないことでもある」との意見がありました。

児玉先生からは、子どものことを心配するのは当然だが、「私はいいけど、お前たちだけは…」ではダメ。医師として、高齢者が心不全などで亡くなる例が増えているのを実感している。家族みんなの日々の実践が福島につながっていく、とのお話がありました。

一言ずつで終わってしまいましたが、たくさんのお母さんたちの経験と意見を交換できました。こういう機会を今後もつくってほしいとの要望が出されて、話し合いは終わりました。

【ときがわ町】学校給食の放射能検査

食材 2 品と混合したものを毎日、調理の前に測定しています。測定器は午後、町民に開放され、気になる食材を持ち込んで測定できます。うらやましい充実ぶりです。

テーブル②

原発と事故

始末できない核のゴミ

助言者：水澤 靖子（反原発・出前のお店）

コーディネーター：合田 隆（志木市在住）

参加者は 16 名。自己紹介も兼ねて、日ごろ考えていること、思っていることを出しあいました。

全員が「原発はあってはいけない」との意見で、その理由として多くの方が挙げたのが放射性廃棄物の問題。特に使用済み核燃料の「地層処分」は、技術的にも実用化のメドが立たず、処分地を見つけるアテもない。

「いま私たちが使っている電気の後始末を子孫の代に残してはいけない」、「安倍さんは今が良ければいい、としか考えていない」、「目先のカネのことしか考えていない」、「今すぐとめることが子どもたちへの責任」など。

お連れ合いが陸前高田出身の方から「原発が事故を起こすと、昨日と今日と明日が断ち切られる」。妹さんが群馬でシイタケを栽培されている方から「つくったものを捨てなければならない。賠償すればいいというものではない」。

そのほかに、以下の意見がありました。

●原発については、賛否に至るまでの、話し合ったり考えたりするプロセスがあまり大事にされていない感じがする。賛否を問うのでなく、フランクに話し合いたい。専門知識がないとものを言っではいけないような空気もある。

所属する.NPO で、福島事故のあと、原発とエネルギーを語り合う材料として教材をつ

くり、各地でワークショップを開いたりしている。学校で原発を教えるのがタブーになっているのを感じる。大学生の間でも、率直な話し合いができない雰囲気があるようだ。

●茨城の牛久市から、児玉先生のお話を聞きたくて参加した。牛久は農業、牧畜が盛んだが、福島原発からの風の通り道でホット・スポットになり、モロに被害を受けている。

東海原発の 1 号機は日本で初めての商業用原子炉。1998 年に運転を停止したが、解体に 20 年以上かかり、しかも、廃棄物の処分場が決まっていない。

●再生可能エネルギーをどこまで利用できるのか。太陽光発電は、パネルが廃棄物になったときに環境を汚染する。風力発電も鳥が死ぬ。火力発電でいいのではないか。泥炭の燃焼時に出る CO2 で発電する技術も開発されている。

●「地球温暖化防止」で熱心に活動している人が、資源エネルギー庁の予算で開く「電気のゴミ」ワークショップに協力している。環境問題に敏感な「ゴミおばさん」たちを、「原発は CO2 を出さないから環境に優しい」と、取り込もうとする動きに注意しなければいけない。

これらの意見に対して、助言者とコーディネーターから、「原発は温暖化防止に役立たない」、「核燃料サイクルで再処理しても廃棄物は減らない」、「原発の建設ではなく、解体・廃棄物の処理が産業化すれば、原発立地県に雇用が生まれる」などの意見が出されました。

どの方の意見からも、日ごろ脱原発の運動に取り組むなかで考えてきた、熱い思いが伝わってきました。

「このような話し合いの機会を、またつくりましょう」と、再会を期して終わりました。

水澤 靖子さん 「原子力政策の転換を！」の思いを、普通の市民が自分の言葉で伝えていく…。チェルノブイリ原発の事故後、故高木仁三郎さんが「講師養成講座」を開催。その受講生が「反原発出前のお店」を出しました。福島原発の事故後、出前（講師派遣）の注文が急増しています。

テーブル③

脱原発と自然エネルギー なぜ原発を放棄しないのか

助言者：向井 雪子（未来の福島子ども基金）

コーディネーター：大畑 豊（志木市在住）

参加者は 17 名。日本に原発が建設されはじめたころから何十年も関心を持ちつづけてきた人と、3.11 以後に持つようになった人がいました。

助言者が、立命館大学教授の大島堅一さんの著書『原発はやっぱり割に合わない』から、エネルギー源ごとの発電コストの表などを資料として配布。「原発は他の電力に比べて安い」と言われるが、廃炉や廃棄物の処理にかかる費用を計算に入れていないからで、これらを入れれば火力よりも高くなることを説明。

これに対して、「原発のコストが、必ずしも安くないことは理解できても、企業が安定した電力を得るには原発は必要なのではないか」という意見が出ました。

これに対して助言者が、5 月に浜松で開かれた“福島の現実と浜岡の未来”というシンポジウムで、牧之原市の西原市長が「原発があるために企業が撤退を考えている、新たな企業誘致も難しい」と言われたことを紹介。

出席者の中からも、「風力発電は不安定と言われるが、福島第一原発の事故を見ても、原発が一番不安定なのではないか」、「日本は原発の建設や核燃サイクルの実現に多額の費用をかけ、ソフトエネルギー、自然エネルギーの開発が遅れてしまった。原発にかけてきたお金を、これらの開発に充てるべき」との意見が出され

ました。

「世論調査などで明らかなように、国民の大半は脱原発を望んでいるのに、なぜ、そうならないのか?」、「なぜ、これだけの被害を及ぼした東電がつぶれないのか?」という疑問が出されました。

これに対し、助言者から、東電株主運動（東電の株主となり、株主総会などで脱原発を提案）での議論を踏まえて、以下の説明がありました。

東電をつぶすと株価がゼロになり、借入金の返済もできなくなって、銀行、生命保険会社などの損害が莫大になる。また、原発に未来はないことを見抜けず、破たん企業に融資した責任を問われる。東電を会社として存続させることが、自らの損害を少しでも食い止め、ひいては経済界全体の利益になる。

政府も、このような経済界の意見に沿って、電力会社を生きのびさせようと、原発を廃炉にさせるのではなく、運転を続けさせようとしている――。

出席者から、「国も東電も国民のほうを向いていない」、「国が原発や核燃料サイクルを放棄しないのは、核兵器を持ちたい、そのために核兵器をつくる潜在能力を放棄したくないという理由があることが、さまざまな文献から明らかになっている。だから、どんなにお金を使っても、原発にしがみついている」との指摘もありました。

これらの話し合いを経て、原発推進の論理には命の問題はまったくない。お金もうけだけの話。私たちは、脱原発の運動を強めるとともに、国民の意見を反映できる政治の実現にも力を入れなければ、という話になっていきました。

向井 雪子さん 1991 年、新座で「チェルノブイリと核の大地 広河隆一 写真展」事務局に参加。同年、「チェルノブイリ子ども基金」事務局のスタッフとなり、被災した子どもたちの救援活動に。福島で原発震災が起きると「未来の福島子ども基金」の設立に参加、被害者への支援も続けている。

放射能測定報告

みんなの測定所・ふじみーる

石田 照美

放射能の市民測定所ふじみーるも今回のワークショップに参加させていただきました。

ふじみーるが設立されて1年。この間、主に郵送による測定でしたが、今回初めて測定機を会場に持ち込んで測定し、測定機本体や、放射線を検知する検出器を見ていただきました。

実地に、1000Bq/Kg 程汚染されている椎茸を持ち込み、検出器を測定機から出して直接測定し、汚染の度合いをモニターで確認していただきました。どんな風に測定するのか、多少はご理解いただけただかと思えます。会場で正確に測るには、事前の準備時間が足りず、デモンストラーションになりました。

測定資料として、掃除機のゴミパックの関東、関西、福岡などの測定結果を配布しました。そ

の資料から、関東がいかに汚染されているか、実感して頂けたと思います。

このゴミパックの資料は、ツイッターで公表したところ、860 を越えるリツイートなどがあり、皆さんの関心の高さが分かりました。

反省点として、お預かりした検体の返却が遅れたことや、個別に結果をお知らせするなど、丁寧な対応が欠けていました。検体をご提供いただきました方へお詫び申し上げます。

また、パソコンで測定の様子や資料の説明などする予定でしたが、測定機用にパソコンが常時必要な事を忘れていて、説明用のパソコンが無く、口頭でご説明しました。次の機会には改善したいと思います。



↑ 測定器を囲んで、石田さんお話を聞く参加者

お持ちいただいた検体の測定結果（セシウム）

検体	採取した場所	セシウム合計	コメント（石田）
花壇の土	新座市	63.5±12.3 Bq/kg	花壇の土として、この近辺で普通の汚染度だと思えます。
ベランダの土	新座市	658.0±96.0 Bq/kg	ベランダには表層土が飛んできて濃縮されるので高くなります。
白米	埼玉県大利根町	検出下限値（セシウム合計、1.42 Bq/kg）以下	下限値以下で、かなり低そうです。
玄米	埼玉県大利根町	検出下限値（セシウム合計、2.16 Bq/kg）以下	//
砂場の砂	朝霞市南割公園	69.9±11.1 Bq/kg	砂場としてはちょっと高い気もしますが、周囲の土の汚染が持込まれるのでしょうか。
掃除機のゴミ	新座市野火止	732±106 Bq/kg	2011年9月～13年6月。（節電のため、月1～2回使用）。
ベビーダノン（緑野菜）	イオン大井店	検出下限値（セシウム合計、1.1 Bq/kg）以下	赤ちゃんの食べ物なので18時間測定しました。セシウムはほとんど入っていないように思います。製造会社に測定値を問い合わせたところ、「国の基準値以下だから安心」と、答えない姿勢に不安を感じました。

参加者のご意見

～アンケートから～

アンケートを提出してくださったのは 27 人で、参加者（スタッフを除く）の約半数でした。

★年齢は？

30代 6人、40代 4人、50代 3人、60代以上が 14人と、会場の印象よりも高めでした。

★この集まりを何で知りましたか？

チラシだけを挙げた人は 1人。ネットだけは 1人。ほぼ全員が「知人+チラシ」でした。

★原発や放射能に関する情報を、どこから得ていますか？

30代ではインターネットだけを挙げた人が 6人中 4人、60代以上ではマスメディアだけを挙げた人が 14人中 12人と分かれました。双方を挙げた人は 10人でした。

★原発や放射能について、今後、どのようなことを知りたいですか？

【30台～40台】*汚染の広がり *この地域の汚染 *近所の公園の汚染マップ(砂場・遊具の下・植込みなど) *この地域の測定値を細かく *どのように暮らせばよいのか、とくに食べ物について *給食の放射能検査

【50台～70台】*政府の方針は信用できるのか、マスメディア以外の情報 *脱原発の運動の情報 *危機的な状況を人々にわかりやすく *世界の脱原発の運動・方向性 *身近な問題から考え、広められる情報 *現場での具体的なたたかい *放射能の放出・流出について *映像などでの具体的なナマの情報

★ワークショップはいかがでしたか？

【30～40台】*グループでの話し合いが楽しかった *同じ思いの人がいることがわかってよかった *どのテーブルのテーマにも興

味があり、一つしか出られないのが残念でした *自己紹介に時間がとられて児玉先生のお話しが聴けなかったが、みなさんの情報がわかったのもよかった *とてもよかった。

【50～70台】*ファシリテーターの準備が十分でなかったのでは、ワークショップにもかかわらず、意見を言って聞くだけに終わってしまった *意見が活発に出され、思ったより充実していた *よかった (2人)

★児玉先生の講演はいかがでしたか？

【30～40台】*とても参考になりました (4人) *先生の医療現場から感じられたことを話していただき良かった (息子の尿からセシウムが出たが、相談した小児科の先生は鼻で笑っていました。児玉先生のような存在はたいへん心強く感じます。ありがとうございました)

【50～70台】*今まで知らなかったお話で新鮮でした *データとその分析、思考に偏りがあるように思えた *もう少し詳しく聞きたかった *日ごろ考えていなかった視点からの話で、とても面白かった *世界的な見かたで、よかった *これからも、ごいっしょに考えていきたい内容だった *たいへん興味深いお話しでした *よかった (2人)

★主催者へのご意見

*一つの部屋で3グループが話し合ったので、グループ内の意見が聞き取れなかった (2人) *グループの人数が多すぎる (3人) *また開いていただきたい (4人) *児玉先生のお話をもっと聞きたい (3人) *世の中が忘れていけないように、何度も開いてほしい

★お住まいの地域は？

地域がわかるのは、参加票に地域を書かれた 46人とスタッフを合わせて 67人。内訳は新座市 15人、志木市 15人、朝霞市 11人、和光市 9人、その他の東上線沿線 (富士見市・ふじみ野市・三芳町など) 13人、そのほか 4人でした。

地域密着だったことも、遠くからのご参加があったのも、どちらも嬉しいことでした。

第1回ワークショップ会計報告

収入	金額	備考	支出	金額	備考
参加費	22,500	300×75人	会場費(当日)	8,500	設備使用料とも。午前・午後
保育料	900	100×9	会場費(実行委)	2,600	5回開催
カンパ(募金箱)	2,400		チラシ作成費	42,760	20,000枚作成
カンパ(お疲れさま会)	1,240		保育費用	5,120	保育士さん謝礼など
ご寄付	41,000		講師など謝礼	9,200	謝礼・交通費
			雑費	270	
計	68,040		計	68,450	

初めてのワークショップでしたので、準備に手間取り、また、チラシも2万枚つくって、地域によってはポスティングしました。

会場でカンパの訴えをほとんどしなかったことも反省点として残ります。

これらのため多額の赤字となりましたが、ご寄付を申し出てくださいました方々により、収支をほぼトントンにできました。

2回目からは、①実行委員会の会合は無料の公

共スペースで。②チラシは手渡しを原則とする。③保育は「お預かりする」のではなく、お母さんと「孫育て世代」が共同で。などにより支出を節減して、300円の参加費を維持することにしました。

ご寄付を寄せられた方々のお名前を以下に記させていただきます。ありがとうございました。
芦川敏子さん/Uさん/太田弘子さん/Oさん/小島美里さん/島和子さん/須貝郁子さん/多田節子さん/塚原美和子さん/Hさん

ワークショップ 第2回 原発:ここが知りたいQ&A

「知っているようで知らないこと」、「いまさら聞けないこと」、「日ごろ思っていること」、どんどん聞いちゃいましょう。話し合いましょう。



◆日時 11月23日(土・祝)13:30~16:40

◆場所 東北コミュニティセンター(志木駅南口5分)

基調講演 知ってかしこく『ふつうの暮らし』 児玉 順一 (医師)

ワークショップ テーブル① 知ってかしこく『ふつうの暮らし』

テーブル② これでいいの? 給食の放射能検査

テーブル③ 原発いらない暮らしに向けて——この冬の節電

(詳しくはチラシをごらんください)